

人生第二の舞台は「さいたまゴールド・シアター」



蜷川幸雄氏より
直接指導を受ける
田内さん
©荒木経惟

元東京都立小学校美術教諭

田内一子さん（69歳）

2006年3月定年退職

【たうち かずこ】1946年、埼玉県出身。大学卒業後、1968年東京都教育委員会採用。公立小学校の美術教師として勤務、子どもたちへの読み聞かせを得意としていた。定年退職後の2006年より「さいたまゴールド・シアター」の劇団員として舞台に立っている。座右の銘は「一日一生」。夫と子ども2人の4人家族。



——「さいたまゴールド・シアター」は彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督・蜷川幸雄さんが率いる高齢者の演劇集団だそうですが、田内さんがこの劇団に入団しようと思われたきっかけは何だったのですか。

2006年2月、定年を1カ月後に控えていた私は自宅で趣味のクレパス画を描いていました。その時、たまたまつけていたラジオから55歳以上の劇団員を募集しているという情報が流れてきました。「面白そう！」と思った私は、とっさに応募先をメモしていました。

——それで、すぐに応募されたの。

いえ。締切当日ギリギリまで悩んで応募しました。というのも、既に定年後の再任用が決まっていたので、最初は「両立できるなら…」と思ったのですが、劇団員になると週5日のレッスンがありました。どちらか一つを選択しなければならなくなり、最終的には「ここで応募しなければ後悔する」と思い再任用を辞退し、劇団員を選びました。

実は、それ以前にも市民ミュージカルに出演したことがあるんです。その時、自分でセリフを工夫したり衣装をつくるのがすごく面白くて、また舞台に立ってみたいという気持ちがあるのどこかにずっとあったことも劇団員を選んだ理由です。

——オーディションはいかがでしたか。

オーディションの前日が勤務していた小学校の卒業式というスケジュールでしたので、仕事が忙しくとにかく時間がありませんでした。通勤電車の中で、事前に渡されたセリ

©宮川舞子



2009年6月に上演された第3回公演「アンドウ家の一夜」のワンシーン。学生時代の恩師の危篤をきっかけに、50年ぶりの再会を果たしたのだが…（真ん中のオレンジ色のスーツ姿の女性が田内さん）

フに目を通すのが精一杯。ですから、合格の電話をもらった時は本当に驚きました。

——レッスンはいかがでしたか。

演技の基本となる声の出し方から身体の動かし方、日本舞踊、ダンス、音楽、演出までいろんなレッスンがありました。48名の劇団員の中には未経験者もいましたが、学生時代演劇部だったりプロだったり何らかの経験のある人が多かったです。

そんな中、ほぼ何も知らない状態だった私はよく怒られていましたね。「そんな顔してんじゃねえ！」とか「演技が過剰なんだよ！」とか。でも、どこをどう変えたらいいのかが分からないんです。スタッフや経験者のアドバイスを受けたり、自分で試行錯誤したり、とにかく無我夢中でした。それでも、見ることに聞くこと初めてのことばかりで新鮮でしたし、専門の講師陣のレッスンを受けられ、素



2013年に続き2014年も再演された『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』。11月から12月末までの2カ月間で、3カ国5都市を巡るツアー公演が行われた。写真はいずれもアジア圏初進出となった香港公演の舞台より(写真上:左から4人目が田内さん)(写真下:右端が田内さん) ©宮川舞子

●さいたまゴールド・シアターとは…

彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督・蜷川幸雄氏が率いる演劇集団。「年齢を重ねた人々が、その個人史をベースに、身体表現という方法によって新しい自分に会おう場を提供する」ことを目的に、55歳以上を条件に団員を募集。2006年3月に行われたオーディションには全国から1266名の応募があり、最高齢80歳を含む男女48名が合格した。2015年2月現在、64歳から89歳までの団員39名が活躍している。

さいたまゴールド・シアターHP
http://www.saf.or.jp/gold_theater/

晴らしい体験をさせてもらったと思います。
 —その後、2006年7月の初舞台を経て、彩の国さいたま芸術劇場を拠点にほぼ毎年新作の舞台に立たれているのですね。日本国内のみならず、海外でも公演されたそうですが…。

はい。2013年にパリで海外初公演、翌年にはパリでの再演に加え香港でも公演しました。私の印象としては、日本よりも海外のほうがお客様の反応は良かった気がします。パリでは900席以上ある大劇場がほぼ満員の状態でした。カーテンコールが4回も起こり、スタンディングオベーションでブラボーの喝采を浴びているうちにジワッと涙が出てきました。

面白かったのは、日本と海外では笑いのツボが異なるところです。フランスでは笑いの絡みのあるシーンで笑いが起きるんです。お客様からの反響が違ふことで演じるほうも自然とセリフの言い方が変わってきたり、身

体の動きが良くなってきたり、「芝居ってこんな風に変化するんだ！」と気づけたのも、再演ならではの面白さだったと思います。

—劇団員としてさまざまな経験を重ねながら今年で入団10年目を迎えられるわけですが、さいたまゴールド・シアターに入られてどのような変化がありましたか。

気持ちも身体も自由になったと感じています。もちろん加齢により身体が動かしにくくなるという問題はありますが、物の見方や考え方、身体のとらえ方や使い方が変わっていったことで、すべてから解放されて、自由と感じられるようになったのかもしれない。時間の使い方についても、好きなことのために時間をつくらうという意識が強くなったことで、家事などもさっさと済ませられるようになりました。

その一方、疲れた時は疲れたと素直に言えるようになりましたし、家族もサポートしてくれます。元々現役時代よりも今のほうが時間的余裕はあるのですが、夫や子どもたちが家事を手伝ってくれる分、更にラクになりました。私が気づかないうちにお皿を洗ってくれたり、ご飯を炊いてくれたりして、本当にありがたいです。

—劇団の活動がない時は、どのようにお過ごしですか。

演劇を始めてからというもの、いろんなお芝居を観るようになりました。去年だけで40本以上は観たかな。演劇を軸にして、そこに付随する舞台装置や照明、衣装など興

©宮川舞子



2011年12月に上演された第5回公演『ルート99』稽古場。通称「ルート99」と呼ばれる国道で起こった事件をきっかけに、基地の鳥が抱える問題を描いた作品(前列の帽子姿の女性が田内さん)

味の幅がどんどん広がっていききました。いま特に気になるのは脚本です。セリフも脚本を見るとより深く理解できます。いろんな楽しみを与えてくれるさいたまゴールド・シアターの活動は、私にとって定年後の大きな生きがいです。もし、劇団員じゃなくなったらどうしたらいいかわからないくらいです。

—最後に、現役の地方公務員にメッセージをお願いします。

私にとって劇団での活動は、どれもこれも未経験のことばかり、わからないことばかりでしたが、舞台は楽しくて大好きです。仲間も面白い。だから一歩一歩前へ進んで来られたと思います。スタンディングオベーションを浴びると、もつともつと演じていたいと思います。「やりたい！」と思うことをするのが一番ではないでしょうか。

—これから益々のご活躍を期待しています。